様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６３５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３３７５

研究課題名（和文）「器の信仰史」として見る汎アジアの舎利容器研究

研究課題名（英文）A Study of Reliquary in Pan-Asia from the Perspective of "The Histry of Worshup in Vessels"

研究代表者
加島　勝（Masaru, Kashima）

大正大学・文学部・教授

研究者番号：８０２１４２９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、仏教が伝播したアジア地域に普遍的に存在する舎利信仰を、舎利を納める「器のかたち」とそれを埋納する方法に着目し、各地域にわたる現地調査を通して、舎利の意味の変遷と両者の相関関係を明らかにすることを目的としたもので、この目的を達成するため南・北インド、ネパール、新疆ウィグル自治区、スリランカ、インドネシアに及ぶ凡アジア地域に所在する仏教寺院遺跡に関する現地調査と博物館における関連遺物調査を実施した。
その結果、舎利容器の伝播は北伝ルート（北インド～ガンダーラ～西域）と南伝ルート（南インド～スリランカ～インドネシア）があったのではないかというこれまでにない全く新しい視点が開けてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
舎利容器は北インドのピプラワー塔において発見された塔鋺形舎利容器が最も古い形を示し、この形の舎利容器がガンダーラ～西域に至る北伝ルートへ伝播していった。これに対し南インド～スリランカ～インドネシアへ至る南伝ルートでは、スリランカのヤントラガラ（Yantragala）やインドネシアのペリピー（Periphi）と呼ばれる石製や銅製の聖遺物入れが注目され、その祖形は、南インドのアマラーバティ大塔の張り出し部に置かれた石製容器である可能性が高い。
以上から生じた「器」の伝播には北伝ルートと南伝ルートがあったのではないかという、これまでにない新視点は、今後、仏教の伝播の過程を具体的に知る手掛かりになる。

研究成果の概要（英文）：The subject of this study's consideration is the worship in the Buddha's relic in pan-Asia. We conducted a field survey in each region, focusing on the shape of the vessel that holds the relic and the way the vessel is buried. The purpose of this study is to elucidate two things: how the reliquary has changed over time and region, and how the correlation between the relic and the vessel has changed. In order to achieve this goal, we conducted field surveys of Buddhist temple sites in southern and northern India, Nepal, Xinjiang Uighur Autonomous Region in China, Sri Lanka, and Indonesia, as well as surveys of related artifacts in museums in each region. As a result, an unconventional new viewpoint has been opened that the propagation route of the reliquary is assumed to be the north route (North India - Gandhara - West) and the south route (South India - Sri Lanka - Indonesia).

研究分野：仏教工芸史

キーワード：アジア　仏教　仏塔　舎利　信仰　容器　鎮壇具　奉納品

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

舎利信仰は、仏教の信仰の中でも根源的なものであり、仏教が伝播した地域に普遍的に存在する。釈迦の遺骨を指す舎利を祀るため、建築・容器・供養の次第・儀礼等が、各地域で順次整備された。隋文帝が、仁寿元年（601）から三度にわたり中国全土に建立した仁寿舎利塔は、東アジアの舎利信仰の歴史における最も大規模な事業である。埋納に至る儀式の次第等が文献・石刻文に記録され、また、塔下銘と舎利を納める容器が遺物として残されている。戦前よりその意義や制度に関心を置く主に文献からの研究がなされ、これが国家的な仏教事業でありつつ、地方統治の一施策としておこなわれた実態が明らかにされてきた。

これに対し、研究代表者は科学研究費補助金による研究「隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究」（基盤研究（B）、2009～2011 年度）、「仁寿舎利塔の信仰と荘厳に関する総合的研究」（基盤研究（A）、2012～2015 年度）を二度にわたって組織し、仁寿舎利塔事業を核とした隋唐時代の舎利信仰に関して、舎利容器等の遺物やその埋納場所等の地理環境といった、主に文献以外からの総合的調査を進め成果をあげてきた。その成果は、報告書『隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究』（2012 年刊行）、『仁寿舎利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究』（2016 年刊行）にまとめている。

これらの成果により浮かび上がったのが、①「器のかたち」、②「舎利の意味」というふたつの観点とその相関関係である。

アジアの舎利容器は、中央アジアを通るシルクロードの西域北道では、帽子箱形（図１）と壺形が代表的で、タクラマカン砂漠東端（カラシャール～トルファン）では、スライド式の蓋を備えた直方体形の木箱の容器（図２）が知られ、またトヨク～中原地域では塔鋺形の容器（図３）が用いられた。以上は全て西域北道であり、西域南道の様相は基礎データを欠くため捉えがたい。中国中原地域では、円筒形容器（図４）も知られるものの、北魏以降、覆斗形の蓋付き容器（図５）が舎利容器の一典型となり、その後、唐に入り棺形の容器（図６）へと展開していった。

こうした舎利容器に特徴的なのは、固有の形が舎利納置のために生み出されたのではなく、特定の用途を持つ器の形や、別の文脈で意味を成した図像が複合的に組み合わされ、舎利を納める器として仕立てあげられた点である。例えば、帽子箱形は、その形が中原の漢代以来の伝統的な容器「奩（レン）」と共通すると推測され、直方体形は同形の宝石箱、覆斗形は中国江南地域に見られる印箱と形が共通する。また、日本の崇福寺塔跡出土の舎利容器（図７）は、箱形容器を入れ子状にした台付き箱を鏁子で厳重に封印する例で、中国に見られる容器との関連が想定される。

このように、どこで、どのような器の形状・素材・図様が採用されてきたのかという①「器のかたち」の問題は、舎利が各地域の社会においてどのような存在として受容されたのかという②「舎利の意味」と相関していることが浮かび上がる。

舎利の種類や性格は、それを荘厳する器や埋納方法とどう関わったのか。このような問題意識から、本研究は、①「器のかたち」に着目することを通して、②「舎利の意味」を総合的に把握することを目的として立案された。

２．研究の目的

本研究は、仏教が伝播したアジア地域に普遍的に存在する舎利信仰を、①舎利を納める「器のかたち」とそれを埋納する方法に着目し、各地域にわたる現地調査を通して、②「舎利の意味」の変遷と①②両者の相関関係を明らかにすることを目的としたものである。器形・素材・図様という「器のかたち」は、一貫した共通性を見せつつも、地域・時代に応じて様々な差異性を見せている。そうした「かたち」は、各地域と社会において、舎利の三つの「意味」―すなわち、ａ．遺骨（真身舎利）、ｂ．宝珠、ｃ．経典（法舎利）と相関関係を持ちながら、その振幅の中で生み出されてきた様相を物語ると想定される。本研究は、舎利信仰を「器」という具体的な切り口から捉えようとする、新たな「器の信仰史」の構想である。

３．研究の方法

本研究は 4 ヶ年の研究期間の研究期間の各年度とも、１．事前協議及び交渉（初年度のみ）、２．現地調査、３．収集データの整理と解析、４．検討会の開催を研究方法の基本とした。特に中国国内外を中心に海外で実施する２．現地調査は本研究の中核をなすもので、各年度半ばに研究代表者統括のもと研究分担者及び中国側研究協力者全員の参加を原則として行なった。現地調査によって得られたデータを研究分担者それぞれの役割に応じて、年度後半に整理・解析し、年度末に検討会を開いて、成果について協働で分析し、問題点を整理して次年度の研究に備えた。最終年度にはデータベースを完成させ、研究成果を反映させた成果報告書の準備を行ない、研究成果全体の公開に備えた。

４．研究成果

各年度に以下のような現地調査及び関連遺品調査を行なった。

初年度（2016）：（１）中国新疆ウイグル自治区と（２）北インド～ネパールを対象地域とした現地調査を実施した。（１）新疆ウイグル自治区では、①寺院址等遺跡の調査としてブザク・マザー（ホータン市ホータン県）、ヨートカン（約徳干）　遺跡（ホータン市ホータン県）、ダマコ（達瑪溝）仏教遺跡群（ホータン市チラ〔策勒〕県）、ラワク（熱瓦克）仏寺遺跡（ホータン 市

ロプ県）を、②関連遺品調査としてホータン博物館展示品、ロプ博物館展示品、新疆ウイグル自治区博物館展示品を調査した。 また、（２）インド～ネパール国内においては、①寺院址等遺跡の調査としてナーランダー仏教大学遺跡（ビハール州ナーランダー）、王舎城（ビハール州ラージギル）、ブッダ・ガヤー（ビハール州ガヤー県）、サールナート遺跡（ウッタル・プラデーシュ州サールナート ）、クシナガラ（ウッタル・プラデーシュ州カシア付近）、ピプラワー遺跡及びガンワリア遺跡（ウッタル・プラデーシュ州バスティ 県）、ティラウラコート遺跡（ネパール・ルンビニー西郊約 30 ㎞）、マヤ堂遺跡（ネパール・ルンビニー）等を、②関連遺品調査としてコルカタ・インド博物館展示品、サールナート考古博物館展示品、 カピラヴァストゥ博物館展示品、ルンビニー博物館展示品、ネパール国立博物館展示品等の調査を行なった。以上の結果、（１）では、西域北道（タクラマカン砂漠北辺）のクチャ～カラシャール地域に集中的に見られる大谷探検隊将来品を典型とする帽子箱形舎利容器は、西域南道地域では見出すことができず、同地域ではキジール石窟３区マヤ洞将来のドルナ像が捧持している壺形土器が舎利容器として用いられていたようである。西域北道のカラシャールからトルファン地域で見られる木製方形舎利容器に似た形状の木製箱が、西域南道でも漢代以来散見され、特に蓋をスライドする形式は木棺にも見られることがわかった。また（２）では、①釈迦の遺骨が８カ国に配分された内の一つである可能性が高いピプラワー塔跡出土の石製舎利容器を方形石函に納めた埋納法は中国の仏舎利埋納法を考える上で貴重である。②カピラヴァストゥ博物館展示品の石製容器の蓋は、ピプラワー出土の頂部が円錐形を呈した石製舎利容器との関連が窺えた。③ネパール国立博物館蔵ルンビニー出土の金製舎利容器はこれまでわが国では紹介されてこなかったもので 、特に円筒形を呈したその器形は隋時代の舎利容器との関連が窺える興味深いものであった。

第２年度（2017）：（１）スリランカでの現地調査と（２）日本国内での関連遺品調査を実施した。（１）では、①寺院址等遺跡の調査としてイスルムニヤ・ヴィハーラ、アバヤギリ・ヴィハーラ、ジェータヴァナ・ヴィハーラ等 （以上アヌラーダプラ）、ダンブッラ石窟、ダルダーマルワ寺院、ポトグル・ヴィハーラ、パバル・ヴィハーラ、ガル・ヴィハーラ、ティワンカ・ピリマゲー等（以上ポロンナルワ）、アル・ヴィハーラ、（マタレー）等を、②博物館等での調査としてコロンボ国立博物館、イスルムニヤ・ヴィハーラ博物館、アヌラーダプラ考古博物館、ジェータヴァナ博物館、アバヤギリ博物館、シギリヤ博物館、ミヒンタレー考古博物館、キャンディ王宮博物館、アル・ヴィハーラ博物館等の展示品の作品調査を行なった。 以上の結果、（１）では、コロンボの国立博物館、アヌラーダプラの国立博物館等でヤントラガラ（図８）と呼ばれる石製聖遺物入れや金製、水晶製、石製の塔形舎利容器を調査することができた。石製方形のヤントラガラには一辺が 15 ㎝ほどの小型のものからジェータヴァナ・ヴィハーラの像堂のもののように一辺が 3㎜ を超える大型のものがあった。従来ヤントラガラは身の内部に 3 個×3 個、5 個×5 個の方形くぼみを設けて舎利等の納入品を納め、仏塔や仏像の足元に埋納されたとみなされてきたが、今回の調査で舎利容器ではなく、仏塔や仏像の安全を地神に願って埋納された地壇具の可能性が高く、舎利は塔形の舎利容器に納められることが多いことがわかった。また、（２）国内関連遺品調査では、大谷探検隊将来の舎利容器及び化粧箱（東京国立博物館蔵）、伝ガンダーラ出土石製舎利容器（石洞美術館蔵）等の作品調査を行なった。その結果、大谷探検隊所蔵の舎利容器 （中国新疆ウイグル自治区クチャ付近発見）は発見当初器面全面が黒色に塗られ、小方形の金箔が貼られていたことが確認された。これにより同容器は器面全面に華麗な色彩で亀茲楽を表した別の用途を有していたものを黒色に塗って舎利容器に転用した可能性があることが判明した。

第３年度（2018）：（１）インドネシアの中部ジャワ・ボロブドゥール周辺での現地調査と（２）日本国内での関連遺品調査を実施した。（１）では、ジャカルタ国立博物館、ソノブドヨ博物館、スラカルタ王室図書博物館（ラジャ・プスタカ博物館）等でペリピー（図９）と呼ばれる石製聖遺物入れやその内容品 15 件を調査することができた。その結果、ペリピーには銅製壺形のものもあるが、多くは一辺が 20 ㎝～30 ㎝ほどの蓋付き方形の石造品であった。その石材には安山岩、白石（ホワイトストーン）が用いられている。ペリピーの蓋の上面には蓮華文と思われる装飾文様が施されている例もあるが、ペリピーのほとんどは仏教関連遺跡ではなく、ヒンドゥー教寺院のリンガ・ヨニの真下の地上面に安置されていることから、地神への奉賽品を納入したものの可能性が高い。また中国の舎利石函に類似した外観を呈するもの（スラカルタ王室図書博物館蔵）もあり、中国との影響関係があるのかどうか、前年度に調査したスリランカのヤントラガラとともに今後解明すべき課題となった。（２）では、海外研究協力者である冉万里氏（中国西北大学文化遺産学院教授）を招へいし、奈良・当麻寺西塔の心柱先端から発見された舎利容器を日本側研究者と協働で調査した。その結果、同舎利容器は国内及び中国、朝鮮半島の関連遺品との比較から、7 世紀末～8 世紀初めに製作されたものと推定した。

最終年度（2019）：南インドにおいて（１）仏教寺院遺跡に関する現地調査と（２）博物館における関連遺物調査を行なった。（１）ではテランガーナ州及びアーンドラ・プラデシュ州のクリシュナ川流域において、アヌプ遺跡、アマラヴァティ大塔、ガンタシャーラ大塔、グントゥッパリ遺跡等の仏教寺院遺跡において伽藍配置、ストゥーパ、仏堂、堂内礼拝空間、仏像彫刻、建築装飾等について調査した。（２）では、テランガーナ州ハイデラバードにおいてテランガーナ州立博物館、Ｂ・Ｍ・ビルラ科学博物館、サラール・ジャング博物館、アーンドラ・プラデシュ州においてアマラヴァティ考古博物館、ガンタシャーラ考古博物館、州立バプール博物館（ヴィジャヤワダ）において実施した。テランガーナ州立博物館やアマラヴァティ、ガンタシャーラの

仏塔に隣接する博物館において、クリシュナ川流域に所在するストゥーパ出土の舎利埋納関係遺品を調査することができた。その結果、一昨年度のスリランカではヤントラガラ(Yantragla)、昨年度のインドネシアではペリピー（Periphi）と呼ばれる石製や 銅製の聖遺物入れの所在に注目したが、今回の調査で、アマラヴァティ大塔のストゥーパ南面の張り出し基台の前面に、5本のアーヤカ柱の地下に埋納物を納めた 石製「容器」が置かれており、これらがヤントラガラやペリピーの祖形である可能性が高いことをつきとめた。ここに納められた水晶製容器は舎利容器とはみなされないため、これは奉納品ないしは鎮壇具、地鎮倶の可能性が高いと考えられる。

以上のようにヤントラガラやペリピーは北伝ルートには見られない南伝ルート独特の器形であることを突き止めることができた。さらに、中国においては、出土地が不明であるが同形の容器である四神十二支鎮墓石（天理参考館蔵）が注目される。それは仏教・ヒンドゥー教・道教と製作の拠り所とする宗教に違いがあるものの、奉献品を一定の秩序で並べるという共通した働きを示していると解釈することが可能で、この点については今後改めて調査研究を進めていきたい。

図１

図２

図３

図４

図５

図６

図７

図８

図９

地図

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 加島勝	４．巻 11
２．論文標題 日中韓密教法具研究の新視点―金剛鈴を中心に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『アジア仏教美術論集　東アジアⅥ　朝鮮半島』（中央公論美術出版）	６．最初と最後の頁 421頁-448頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加島勝	４．巻 16
２．論文標題 新羅の金属工芸品―佐波理と真鍮製品を手がかりに―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第16号　論集　新羅仏教の思想と文化―奈良仏教への射程―』（法藏館）	６．最初と最後の頁 85頁-98頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加島勝	４．巻 7
２．論文標題 正倉院宝物螺鈿紫檀五絃琵琶の淵源について―捍撥の図様を手掛かりとして―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『アジア仏教美術論集　東アジアⅡ　隋・唐』（中央公論美術出版）	６．最初と最後の頁 559頁-578頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡龍作	４．巻 3
２．論文標題 奈良時代東大寺における「天」の意義と造形	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『東大寺の新研究　第3巻　東大寺の思想と文化』	６．最初と最後の頁 185頁-225頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長岡龍作	4．巻 7
2．論文標題 感応と図様―仁寿舎利塔に見る表象形式と思想	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アジア仏教美術論集　東アジアⅡ　隋・唐』（中央公論美術出版）	6．最初と最後の頁 255頁-288頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡林孝作	4．巻 1
2．論文標題 関東地方の漆塗木棺―埼玉県八幡山古墳木棺を中心に―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『泉森皎先生喜寿記念論集』（泉森皎先生喜寿記念会）	6．最初と最後の頁 147頁-157頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大島幸代	4．巻 7
2．論文標題 迦毘羅神考―霊泉寺大住聖窟における造像を中心に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アジア仏教美術論集　東アジアⅡ　隋・唐』（中央公論美術出版）	6．最初と最後の頁 133頁-162頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加島勝	4．巻 第5号
2．論文標題 釣針形刻線から見た武寧王陵出土承台付有蓋鋺の製作地・製作年代について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 パラゴーネ	6．最初と最後の頁 54頁-60頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 泉武夫	４．巻 39号
２．論文標題 中世尺八の肖像―朗庵像をめぐって―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『美術史学』	６．最初と最後の頁 1頁-31頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 泉武夫
２．発表標題 日本的弥勒信仰与美術―兜率天的菩薩像及其源流―
３．学会等名 2018年佛教美術源流国際検討会（華東師範大学、上海）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 長岡龍作
２．発表標題 清凉寺釈迦如来像の胎内に見る信仰世界
３．学会等名 名古屋大学・ハーバード大学国際ワークショップ「像内納入品研究の地平」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 長岡龍作
２．発表標題 霊験仏をつくる―頬焼阿弥陀縁起をめぐって―
３．学会等名 シンポジウム「運慶と東国の宗教世界」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 泉武夫
２．発表標題 隋・唐以降の東アジア兜率天の弥勒信仰と美術について
３．学会等名 シンポジウム「中央アジア科研全体研究会―中央アジアの弥勒信仰と美術　その2」（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 岡林孝作	４．発行年 2018年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 426
３．書名 『古墳時代棺槨の構造と系譜』	

１．著者名 菅野成寛・八重樫忠郎・藤里明久・菊池勇夫・冨島義幸・浅井和春・加島勝・泉武夫・榎本淳一・劉海宇・佐倉由泰	４．発行年 2018年
２．出版社 小学館	５．総ページ数 128
３．書名 中尊寺と平泉をめぐる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	泉　武夫 (Izumi Takeo) (40168274)	東北大学・文学研究科・名誉教授 (11301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大島　幸代 (Oshima Sachiyo) (60585694)	龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員 (34316)	
研究分担者	長岡　龍作 (Nagaoka Ryusaku) (70189108)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	岡林　孝作 (Okabayashi Kosaku) (80250380)	奈良県立橿原考古学研究所・調査部・部長 (84602)	
研究協力者	冉　万里 (Ran Wanli)	西北大学・文化遺産学院・教授	